

美しくつかしい、日本をのせて。

Cradle

特集
絹を紡ぐ庄内の道

庄内憧憬
下重暁子 作家

【クレードル】出羽庄内地域文化情報誌

11 2013 November/December
TAKE FREE
NO.20

Cradle 11

美しくつかしい、日本をのせて。
【クレードル】出羽庄内地域文化情報誌

2013 November/December
平成25年11月1日発行(隔月号毎月発行)第4巻2号(通巻20号)

発行/クレードル事務局 山形県鶴岡市山王町8-15【株式会社 出羽庄内地域文化センター】電話0235(64)0888
制作/クレードル編集部 山形県酒田市京田2-59-9【コソツ・コーポレーション】電話0234(41)0012

FIDEA GROUP



鶴岡市/米の粉の滝

旅人のこころ染める 庄内秋景

 庄内銀行

限られた中で、せいっぱい美しいものを生んだ
江戸時代の筒描き藍染。その心意気は、
庄内に生きた武士や人々に通じるものだ。

松ヶ岡から柿が送られてきた。
私の目には、一面に大きな掌を
ひろげた庄内柿の黒々とした枝ぶ
りが目に浮かぶ。

月山の麓、松ヶ岡開墾場の象徴
は何ととっても柿畑である。春に
は桜や菜の花の咲くのどかな風景
もあり、秋にはダリアが一面に咲
くが、それは柿畑のそえ物でしか
ない。

力強く根を張って、明治以後、
職を失った武士たちをささえた柿と、
現在五棟残っている堂々とした蚕室。
かつての城の瓦をのせたその蚕室
に惚れて、私の蒐集品の藍木綿の
筒描きの展示をした。何年ぶりだ
ろう。たしか今年の夏で三回目、
庶民の美、筒描きはびつたりこの
建物に合っていた。

飾りつけの日、私のNHK文化
センター青山教室に、はるばる鶴
岡から通ってきてくれていた関根
薫さんが朝早くから手伝いに来た。

私はといえば、直前に軽井沢で
左手首を骨折し、ギブスで固めた
手を首からつっていた。口で指図
はできるけど、手伝うことはでき
ない。

徐々に壁に飾っていき、最後に、
月山の見える南側の雨戸を開けた。
涼しい風が通りぬけ、柿畑の向こ
うに夕焼け雲をいただく月山が見
えた。

一日仕事で、すべて終わった頃
には、夕闇が迫ってきていた。今
回は二カ月間の展示である。七月
と八月、暑いさなかに訪れた人た
ちが、一瞬爽やかな気持ちになる
ことができたなら、いうことはない。
藍は日本の色だ。それも庶民の…。
江戸時代、布は木綿と麻、色は藍
と白しか許されなかった中で美し
いものを生んだ。

祝い事には朱を入れたり、鶴亀
松竹梅などおめでたい柄を紺屋さ
ん（染屋さん）に頼んで手描きで
作ってもらおう。この世に二つとな
い一品だけの祝い布団、のれん、
大風呂敷：日用品にも限られた中
でせいっぱい美しいものを生んだ。
そのすがすがしいほどの心意気。
それは庄内に生きた武士や人々に
通じるものだ。

飾り終わって一階のカフェで柿
ジュースを飲んだ。初めての味は
爽やかで、友人にも送ろうと決めた。
最後の掃除をして関根さんが降
りてきた。小雨が降ってきたので
彼女は黒いヘルメットとマントを
羽織り、オートバイに乗って帰っ
ていった。彼女の中にも私は黙っ
て強く根を張った庄内の女性の心
意気を見た。



松ヶ岡周辺の柿畑から見る月山

しもじゅう・あきこ／作家。1959年、早稲田大学
教育学部国語国文科卒業。同年NHKに入局。アナウ
ンサーとして活躍後フリーとなり、民放キャスターを
経て文筆活動に入る。ジャンルはエッセイ、評論、ノ
ンフィクション、小説と多岐。財団法人JKA（旧日
本自転車振興会）会長等を歴任。日本ペンクラブ副会
長、日本旅行作家協会会長。主な著書に、「老いの戒め」
（海竜社）、「この一〇〇人の俳人たち」（大和書房）
「持たない暮らし」（中経の文庫）。今年6月15日から8
月25日まで、鶴岡市松ヶ岡ギャラリーまで、「筒描藍
染展―下重暁子コレクション」を開催。

特集

絹を紡ぐ庄内の道

桑の木を育て、蚕を飼い、繭から生糸を紡いで織物にする――
かつて日本の近代化を支えた絹は、時代の推移とともに衰退し
現在、国内に出回るシルクの9割強が外国産となりました。
養蚕から製品化まですべての工程を有する産地は
ここ庄内のみ。庄内の絹の道がどこから始まり
どこへ向かうのか、その姿を紡ぎます。

山形県立鶴岡中央高校総合学科のシルクガールズプロジェクトで、平成24年度の生徒たちがデザイナー伊藤羽仁衣さんのアドバイスをもとに作ったウエディングドレス。生地は、その前年に鶴岡市内の保育園や学校、福祉施設で行った「蚕の飼育体験」でできた繭を集めて作ったもの。鶴岡シルク100%のドレスとして大宝館に展示されています。(撮影場所 大宝館)

〈参考資料〉

『凌霄史』松ヶ岡開墾場(平成9年)

『鶴岡市史 中巻』鶴岡市(昭和50年)

『鶴岡市史 下巻』鶴岡市(昭和50年)

『広報つるおか 特集―絹織物―』(平成20年5月1日号)

柳洋子・著「士族生活挑戦の社会史」あさま童風社(平成7年)

堀内彬明・著「絹を生むカイ」農文協(平成3年)

大日本蚕糸会「カイ」からのおくりもの

〈協力〉

鶴岡市、鶴岡織物工業協同組合、致道博物館、松ヶ岡産業株式会社、山形県庄内総合支庁産業経済部

酒井忠久さん
Sakai Tadahisa

松ヶ岡開墾場総長の酒井さんは、旧庄内藩主酒井家の18代当主。「『殿様』はニックネームだと思っています」とニコリ。



山田鉄哉さん
Yamada Tetsuya

松ヶ岡開墾場理事長の山田さんは「殿様が右と言えば、俺がだも右だもんだ」と笑って語ってくれました。松ヶ岡開墾記念館にて。




Road of Silk

1.大蚕室が建ち並ぶ松ヶ岡開墾場。明治5年に開墾が始まり、明治10年までに10棟が建設された。松ヶ岡の蚕室は、模した群馬県島村の蚕室を2倍の大きさにしたもの。約140年の歳月を経て現存する5棟は、開墾記念館やショップ、ギャラリー、庄内映画村資料館などに活用されている。2,3.旧庄内藩士3000名が開墾した面積は約311ha(当時94万坪)。一面広大な桑畑となった。4,5.蚕室の中で蚕を飼う女工たち。遊佐から温海まで庄内一円の人が松ヶ岡に働きに来ていた。大正期には、鶴岡の就業人口の6割が絹産業従事者だったそう。

特集 絹を紡ぐ庄内の道

は大きかったでしょう」と話すのは、松ヶ岡開墾場理事長の山田鉄哉さん。山田さんは、開墾後に城下から松ヶ岡に移り住んだ開墾士の末裔です。「それでも鶴岡城下から松ヶ岡まで毎日歩いて通って、無給でこれだけ広い土地を開墾したわけですから。やはり開墾士一人ひとりに、徳義を本に、世のため人のために生きる」という、徂徠学を重んじた藩の教えが根付いていたんでしょうの」。

その後、開墾地で養蚕が始まると、製糸、織物、精練と事業はどんどん広がり、明治28年には、国内の先進地で習得してきた技術をもとに、洋装用の薄い羽二重を開発。ヨーロッパやアメリカに輸出するようになりました。また明治35年には、トヨタ創始者の豊田佐吉と「綿の豊田、絹の斎藤」と並び称される鶴岡の斎藤外市が、電動式の力織機を発明。瞬く間に

広まり、日本の力織機の半分を占めました。また、外市がその数年後に発明した縺子(サテン)も羽二重を超えて輸出絹の花形へ。織物の大工場が市内にいくつも誕生し、人づくりのための学校や力織機をつくる鉄工所なども次々と生まれ、街は大きく発展しました。

しかし昭和に入り、戦争が激化すると、多くの会社が廃転業を強いられます。戦後は、復元した数社で鶴岡織物工業協同組合を設立するものの、昭和40年代には中国との競争が激化し、日本の絹産業界が厳しい状況へ。絹の消費大国であるにも関わらず、国内の絹産地は次々と消え、いつからかほとんど全ての工程を残す産地は庄内のみとなりました。

地域に一貫製造工程が残る国内唯一の産地。今、それが大切な地域資源であることを自覚した新たな歩みが始まっています。

山背もなく、豊かな地の利に助けられ、日本有数の米どころとして江戸の世を過ごしてきた庄内藩。それが、庄内全域を挙げて絹産業に取り組みようになったのは明治のこと。旧庄内藩士30000人が刀を鋏に代え、月山麓の原生林を開墾してからでした。そうして拓かれた鶴岡市羽黒町松ヶ岡で、開墾場総長を務める酒井忠久さんにお話を伺いました。

「そもそものきっかけは、庄内藩が戊辰戦争によって新政府から『賊軍』と言われたことです。『賊』という呼称は当時の武士にとって最大の侮辱ですからね」。

江戸から明治へと劇的に世の中が動いた時代、戊辰戦争で連勝続きだった庄内藩にとって、加盟していた奥羽列藩同盟の最終的な

降参はとても遺憾なことでした。「ましてや幕府に最後まで忠誠を尽くし、敵地でも相手方の死者を弔うなど、武士の礼儀を最後まで貫いた庄内藩です。譜代として誠実に行ってきたのに何故という思いが強かったと思いますね。でも庄内藩はそれについて抵抗するのではなく、原生林を開墾して絹産業を興すことで、自らの名誉を挽回しようとしたわけです」。

当時、近代国家の建設が急務だった日本にとって、絹は外貨を獲得する一番の輸出品でした。そこに着目した元中老の菅実秀は、庄内を輸出用シルクの一大産地にして、国の発展に貢献することで汚名を晴らそうと考えたのです。「武士が突然農民の真似ごとをするわけですから、もちろん戸惑い

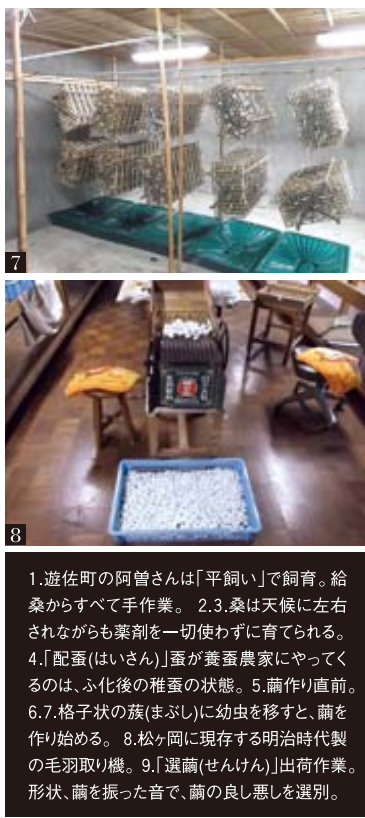
「汚名をそそぐ」を胸に、刀を鋏にかえて原生林を拓いた侍たち

日本の中で最も新しい絹産地といわれる庄内。誕生の背景も、藩の産業振興として始まった他の多くの産地とは異なるといわれています。庄内ならではの絹物語。そのルーツを探りました。

8

人々が育ててきた 「養蚕」という 伝統の農の技術

桑を食み、糸を吐いて繭を紡ぐ蚕は、人が生活に利用するため、家畜化された昆虫です。日本の産業を支えた絹を生む小さな昆虫を、人々は慈しみ「お蚕さん」と呼びました。



1.遊佐町の阿曾さんは「平飼い」で飼育。給桑からすべて手作業。2,3.桑は天候に左右されながらも薬剤を一切使わずに育てられる。4.「配蚕(はいさん)」蚕が養蚕農家にやってくるのは、ふ化後の稚蚕の状態。5.繭作り直前。6,7.格子状の蔭(まぶし)に幼虫を移すと、繭を作り始める。8.松ヶ岡に現存する明治時代製の毛羽取り機。9.「選繭(せんけん)」出荷作業。形状、繭を振った音で、繭の良し悪しを選別。

絹(生糸)を作る工程は、蚕を育てて繭をとる「養蚕」から始まります。養蚕は、桑の栽培と、蚕の飼育という二つの技術を伴う農業として営まれてきました。

昭和のはじめ、絹産業が盛んだった日本では、農家の200万戸余りが養蚕に従事していました。しかし、蚕糸絹業の衰退と共に養蚕農家は減り、現在国内には1000戸、山形県内に8戸、庄内には2戸を残すのみとなっています。養蚕農家は、卵からふ化した稚蚕を購入して、飼育を始めます。幼虫はひたすら桑を食べて成長し、大きくなる体に合わせて4回脱皮をして繭作りに取りかかります。そうしてできた繭を出荷するまでが農家の一連の作業です。

蚕の祖先は野生のクワコという昆虫ですが、蚕は長い歴史の中で人に飼いならされたため、野生への回帰能力を持っていません。肢が短いため移動力もなく、えさの桑も与えられるのを待つのみです。一見、育てやすいようにも思えますが、蚕1頭が一生に食べる桑の量は約100グラム。農家は数万頭単位で飼育しているため、桑の確保だけでも相当な労力です。また蚕は薬害に弱く、桑の葉に農薬や殺虫剤などがわずかに付着して

いるだけでも死んでしまいます。そのため桑園(畑)は農薬の飛散する心配のない山手などにつくられ、蚕舎も清潔であることが絶対条件となります。

庄内の養蚕農家の一人、阿曾一良さんは遊佐町直世の山中に桑園と蚕舎を構え、30年来飼育を続けてきました。「蚕を均等な大きさで育てて、形の揃った繭を出荷するんが私たちの仕事。大切なのは温湿度の管理。適温は24〜25℃だけど、人間が快適な状態が蚕もちようどいいなやの」。

もうお一人の鶴岡市添川の加藤稔さんは、約40年続く養蚕農家の二代目。先代で父の安治さんは、養蚕の技術で天皇杯を受賞し、庄内の蚕業の名を高めた方です。「今も全国の研究者や技術者の方が応援してくださるのは本当にありがたいこと。養蚕業は厳しい状況ですが、蚕が育つ環境には、葉に頼らない農法、農家が生き残るための示唆があるように思います。次世代に遺恨のないように。子どもを育てると同じことです」。

命を育てる産業として、人々が生業としてきた養蚕の歴史は、けがれない自然と、その自然に向き合い続ける人たちによって、無垢な繭に結晶されているのです。

Column 1 蚕を繭に。鶴岡シルクタウンプロジェクト 蚕の飼育体験

鶴岡市は、全国唯一の絹の一貫生産地であることを重視して平成22年度に「鶴岡シルクタウン・プロジェクト」を開始。絹産業の発展と絹文化の普及・継続のためにさまざまな活動を行っています。そのひとつが、市内の保育園や学校、福祉施設で行う「蚕の飼育体験」です。蚕飼育の先生から歴史や飼育方法などを教えてもらいながら、6月上旬から7月上旬にかけて蚕を育てます。できた繭はお土産にしたり、集めて製糸工場です糸にしてドレスにしたり。繭から蛾にして卵を産むところまで飼育した学校もあるそうです。また、より多くの市民に鶴岡シルクを応援してもらおうと「繭人」も募集開始。自宅での飼育体験を勧めています。今年の登録者は約90名。興味のある方は、政策推進課(☎0235-251211)へ。



3年目を迎えた飼育体験は今年、約50カ所で行われました。写真は羽黒第3小学校の3年生教室にて。

Column 2 松ヶ岡を絹文化の 情報発信地へ おカイコさまの蔵

明治時代に旧庄内藩士が開墾してできた羽黒町の松ヶ岡地区。シルクタウン・プロジェクト発足以降、松ヶ岡ではこの地を絹文化の発信拠点と位置づけようと、さまざまな事業を展開しています。そのひとつが開墾場内の建物を活用した「おカイコさまの蔵」。蚕が飼育される6月頃と9月頃には、蔵内で飼育している蚕の姿を自由に見学できます。



「おカイコさまの蔵」は9:00~16:30開館(無料)。蚕は薬剤に弱いため、虫除けグッズなどに要注意。

Road of Silk

特集
絹を紡ぐ庄内の道



技と文化の伝統美 誇るべき日本の絹

蚕糸絹業のともしびを守るため、庄内では繭、生糸、織物製品までの一貫生産を傳承し続けています。メイド・イン・庄内の純国産絹は、未来への一糸の光です。



1.生繭の乾燥が適正でないと、糸が切れやすくなる。2.約100℃の熱湯で繭を煮る。3.繭の糸端を引き出す。4.5.糸が切れると機械は自動停止し、女性たちがすばやく結び。結び目が少ないのが優良な生糸。6.日本屈指の生糸「松岡姫」。7~10.精練を行う織物は多種多様。洗いから乾燥、シワ取りなど、創業時のままの技法と設備が品質維持のカギ。11.あらゆる図柄、彩色ができる手捺染の染めの技。



養蚕農家から出荷された繭は、糸を取る「製糸」工程に進みます。富岡製糸場に代表されるように、日本にはかつて製糸工場が多くありましたが、現在、器械製糸を行っているのは国内に2社。その一つが酒田市の松岡株式会社です。「我々は今、国産の繭だけを扱っています。繭の量が減る中、余すことなく糸を取り、日本の良質な糸を維持していきたい」と話すのはシルク事業部の佐藤輝美部長。こちらの前身は、明治20年に創業した鶴岡市の松ヶ岡製糸所。大正15年のフィラデルフィア万博で出品した生糸が大賞を受賞、高級生糸の「松岡姫」は今もここで紡がれ、京友禅などの着物の生地に使われています。製糸部門は規模を縮小しましたが、「ものづくりにへの姿勢と技術が買われ、近年は旅客機ボーイング787の厨房部品の製造を受託。「日本の心を紡ぎ、未来へ織りなす」を掲げて、伝統と革新を続けています。

製糸工程によって、繊細な糸を撚り合わせた1本はまだ「生糸」の状態です。生糸の表面には、絹のたんぱく質や不純物が付着しています。それらを石けん水やアルカリ水溶液などで取り除くことを「精練」といい、この工程により絹の美しい光沢が生まれるのです。精練は、生糸の段階で行う場合と、織物にしてから行う場合とに分かれますが、鶴岡では昔から織物の精練が行われてきました。羽前絹練株式会社（鶴岡市）は明治39年の創業以来、その古式の手法で精練を行っています。常務の堀井建雄さんにお話を伺いました。「明治時代、輸出用の羽二重という洋装生地の生産が盛んだった頃、『羽前羽二重精練』という技術をもとに創業しました。現在も、国内では希少な広幅の洋装生地を手がけています。「絹」と「洋装用」という一貫した経営から、国内だけでなく中東とも多く取り引きし、市場を国内外へと広げています。「海外から輸入したものを再練り（再精練）することもあります。精練には水質の良さが重要です」。

光を受けて輝く絹は、この後「捺染」といわれる「染め」を施します。絹は染色性が高く、微細な色合いを出すのは熟練の技巧。庄内には「手捺染」を行っている2社の企業があり、職人の手仕事脈々と生き続けています。庄内生まれ、庄内育ちの絹。ここから誰かの暮らしの中で、新たな物語を紡いでいくのです。

Column 3 純国産シルクゲル使用 絹のまち鶴岡のご当地麺 絹の食品開発 I

天然素材である絹は、人の体の内外からなじみやすく、従来から食品としても利用されてきました。鶴岡市では絹の新しい食品素材の開発を目指し、平成8年度から2カ年、大学や企業、研究機関、食品製造業などが連携して調査研究を実施。そこで開発されたのが国産絹100%の「シルクゲル」です。それまでは粉末にしたものが麺やお菓子に使われていましたが、粘性のあるゲル状にしたことで生地に均等に混ざるようになり、無添加のため味にクセが出なくなることが最大の利点です。開発に携わった(株)松田製麺所の松田仁専務によると「麺がなめらかになって、のびにくくなりました。また絹は吸水性が高く、水分を多く加えられるので、麺に弾力が出て食感が良くなりましたね」。



松田製麺所の「絹入りシリーズ」は、庄内観光物産館、物産大店でがんと販売

Column 4 高校生たちが「食べるシルク」づくりに挑戦 絹の食品開発 II

平成22年から県立鶴岡中央高校総合学科の食物系の生徒たちが取り組んできた「食べるシルク」研究。今年度は庄内農業高校の生徒とシルクゲル入りのスイーツづくりに挑戦しました。製作にあたっては助言役をグランドエール・サンの片倉忠直調理長が担当。実際の商品化に向けて奮闘中です。



10月20日開催の「つるおか大産業まつり」にて開発したスイーツを振る舞う高校生たち。

Road of Silk

特集 絹を紡ぐ庄内の道

日本のシルクを改めて 世界に発信するため プロジェクトを続行中

松岡株式会社、羽前絹織株式会社、有限会社芳村捺染、東福産業株式会社の4社で組織する鶴岡織物工業協同組合は、平成19年から東京のクリエイターたちと「キビソ・プロジェクト」を進めています。



蚕が繭を作る時に最初に吐き出す糸、キビソ。材質が太くて硬いため、昔から織物には不向きとされてきましたが、この素材を活かした製品のブランド化が、数年前から庄内で進められています。その第一段階は、機械で量産化するために、細いキビソ糸を開発することから。平成19年、鶴岡織物組合は、日本ファッショングループの代表理事の岡田茂樹さん、テキスタイルデザイナー須藤玲子さんと、世界初となるその技術を庄内の製糸工場（松岡株）で開発しました。そしてそれを用いたテキスタイルで製品開発へ。「Kibiso」として東京で発表すると、エコロジカルでナチュラルな風合いと、国内の精鋭デザイナーたちが手がけた斬新なデザインに大きな反響が起きました。「このプロジェクトのきっかけは、岡田さんが松岡株の製糸工場に積み上げられていたキビソを見つけられたこと」と語るのは、鶴岡シルク株式会社代表取締役の大和匡輔さん。「一貫生産が残ること自体、大切な庄内の地域資源だと気づかせてくれたのも岡田さん。どちらも庄内にいた僕らには見つけられませんでした。そしてそれを機に、自分たちが一生懸命取り組



んできたから、いろんなつながりが生まれてきたんだと思いますね。キビソに新たな価値を創造したこのプロジェクトは、日本の絹の可能性も広げました。保湿力や紫外線吸収力などに優れ、トレイサビリティもしっかりしている日本の絹は、バイオやメデイカルなどいろいろな場面にもっと活かされると大和さんは話します。「日本の絹は世界一になった時に成長が止まってしまったんです。だから上に向かうのではなく、日本の優れた技術力で横の『発展』に切り替えなければいけない。そのひとつがKibisoです。僕たちはこれをフラッグシップに、庄内の絹文化、日本の文化を世界に発信していきます」。シルクロードの北限を、絹の折り返し地点へ。果敢に時代を切り拓こうとする精神は、侍たちが原野を開拓した頃と変わらず、庄内に息づいています。



大和匡輔さん

Yamato Kyosuke

鶴岡シルク株式会社代表取締役。東福産業株式会社代表取締役。Kibisoの企画から販売までをプロデュース。松ヶ岡開墾場内にある「庄内藩」の「kibiso shop」にて。



蚕の糸を巻き取る時に出る「キビソ」（松岡株式会社にて）

Road of Silk

- kibiso 鶴岡シルク**
- ◆プロデューサー／岡田茂樹
 - ◆テキスタイル・デザイン監修／須藤玲子
 - ◆ロゴマーク／佐野研二郎
 - ◆デザイナー／シアタープロダクツ、ソマルタ、まどふ、ミントデザインズなど
 - ◆テキスタイル制作／松岡株式会社、羽前絹織株式会社、有限会社芳村捺染、東福産業株式会社

商品の特徴
キビソ100%のナチュラルな手編み帽子や、キビソと綿や麻など天然素材を組み合わせたストールやバッグ、光沢感とツヤが特長の鶴岡シルクのブックカバーなど。

オンラインショップ

「kibiso shop」
<http://www.t-silk.co.jp/>

取り扱い店
庄内藩（松ヶ岡開墾場内）
※12月～3月は休業

問い合わせ
鶴岡シルク株式会社
Tel/0235-29-1607

特集 絹を紡ぐ庄内の道

Column 6

伊藤羽衣さんと 鶴岡シルクの「クレーン」



バックレーンが4mもある「クレーン」は、平成25年2月にグランドエル・サンでお披露目されました。

個性のかつ可憐なデザインで大人気のドレスデザイナー伊藤羽衣さんが、鶴岡シルク100%のウエディングドレスを作りました。名前は鶴を意味する「クレーン」。実際の結婚式で花嫁さんに着てほしいと、鶴岡市東原町のグランドエル・サン衣装部「アンジェリーナ」で貸し出しています。同店は東北で唯一のハニーブランド取り扱い店。詳しくはエルサンHPへ。

Column 5

庄内の絹文化を 高校生らしい表現で シルクガールズ・ コレクション



昨年度シルクガールズ。中央高の前身のひとつ家政高の創設は、なんと明治の裁縫学校に遡ります。

鶴岡シルクに着目し、自ら衣服のデザイン製作を行っている鶴岡中央高校総合学科家政科学系列被服系の生徒たち。毎年秋にその成果をお披露目するファッションショー「シルクガールズ・コレクション」も企画・運営しています。3年目となった昨年度は「蚕の飼育体験」でできた繭を原料にした鶴岡シルク100%のドレスに挑戦。デザイナー伊藤羽衣さんもアドバイザーとして協力してくれました。作品はその後、市内の学校などを巡回し、現在は大宝館に展示されています。今年度はユニバーサル・デザインに挑戦。子どもも高齢者も障がい者も皆でファッションを楽しめるように、そして鶴岡シルクの素晴らしさを感じてもらえるようにと、高校生らしいセンスと情熱、誠実さで取り組んでいます。



庄内写真季行 15 鳥海山・鶴間池

鶴間池に初冬の風景が広がる。
厳しい冬が訪れる前のたたずまいは、
凜として美しい。

鳥海山の山麓にある鶴間池の初冬の風景である。

冬芽を膨らませたブナ林が凜として立ち、静寂の中に池面が輝きを見せる。まもなく雪が降り積もれば、池面はすっぽりと包まれ、純白の世

界になる。その前の、ひとときの美しさだ。

ここからは、出羽丘陵につながる森の豊かさが見えてくる。生きものの暮らしを実感するには、森の中に分け入ることだ。森は語りだすだろう。

世界中で愛されている
ムーミンとその仲間たち
そんな彼らと毎日を過ごせば、家の中が
きっとほんわかと明るくなるはず

ムーミンの 木製BOXチェア

フィンランドのどこかにあるというムーミン谷の妖精たち。そんな彼らがモチーフの木の椅子は、フタを開ければ収納ボックスに、部屋に置けばモダンなインテリアに、しかも造りは大人の体重にも充分耐えられるというかなりの優れモノだ。作っているのは何と酒田の職人たち。きっかけは3年前、酒田の塗装専門店「ファニーメイク荘内」の進藤さんが、東京の知人から「ムーミンの椅子を作りたいという人がいるから相談に乗ってほしい」と頼まれたことだった。海外生産に押されて国内の家具づくりが低迷し、これからの方向性を模索していた進藤さん。これはチャンスと信用している地元の職人仲間へ声をかけ、塗装、木工加工、スクリーン印刷それぞれのプロと共同で製品づくりに励むことにした。「地方の小さな下請け会社といえども国内外のトップメーカーの仕事長くしてきた会社ばかりです。技術も経験値もずば抜けた職人たちが、初めて自分たちの商品づくりをするとなれば、燃えますよね(笑)」。

こうして酒田の職人と東京のデザイナーが試作をくり返して開発した椅子は、リトルミイ、ムーミン、スナフキンを発売すると、驚くほどの反響が起きた。シンプルで機能的なデザイン、そして酒田の職人たちによる確かな腕と手作りの愛情が、ひとつひとつから滲み出ているからだろう。

ムーミンたちは物語の中で、自然の驚異に脅かされ、人生の寂しさや世の中の不条理に翻弄しながらも支えあって生きる。このBOXチェアは、そんな妖精たちから送られた、名もなき日本の職人たちへのエールでは。そんな思いが頭をよぎった。



ムーミンはフィンランドの作家トーベ・ヤンソンが描いたキャラクターで、日本でも数回にわたってアニメ化されています。木製BOXチェアは、木工加工を齋藤工芸、塗装をファニーメイク荘内、印刷を羽田スクリーン印刷が担当。ムーミン、リトルミイ、スナフキンに、最近ではサブキャラのスニフとスティンキーも加わりました。耐荷重はなんと150kg!

ファニーメイク荘内 ☎0234-31-3030

小春日の 庄内を歩く

秋色が一段と濃くなり、これからやってくる冬を目前に「冬隣」となる頃、庄内平野の森羅万象に寂寥感が深まる。季節の変わり目は行きつ戻りつを繰り返すのだが、特に秋から冬へはことさらになかなかけじめがつかない。それは、寒い冬を少しでも遅らせようとする、わずかな抵抗なのかもしれない。



逆光の嶺のちかづく落穂拾ひ

―上田五千石

雪の鳥海山には、青い空が似合う。庄内の晩秋は時雨れる日が多く、青空がなおさら恋しい。遊佐町にあるお気に入りのお場所から、空と山とを一つに眺めた。眼前には庄内平野。「木守」という季語があるが、農作業には、収穫が終わった後



木守柿と鳥海山

暦の上では11月7日頃の立冬から2月3日頃の節分までを冬とするが、庄内の冬は当然その期間より長くなる。今年10月14日に、昨年より1日遅く鳥海山に初冠雪が観測された。広々とした庄内平野の刈田では、北国から飛来したばかりの白鳥たちが落ち穂拾いをしている。日はまだ匂い輝いているのに、晩秋の寒さが染みてくる。

に翌年の実りを願い、一つだけ木に残しておく習慣があるという。果実は極寒の季節、鳥たちの恵となる。収穫の一部は自然に返すという美しい習慣である。柿の木はまだたわわに実をつけていたが、この「木守柿」をみる機会が多くなると、庄内に雪が降り始める。

木守りに鳥海山は襟正けり ―あべ小萩

日本海に注ぐ月光川水系は、良質で豊富な湧水の流れによって、米の稔りをもたらす。川底まで澄みわたる美しい水流そのにおいを印に、ここで生まれた鮭たちは、日本海を北上し、はるかペーリング海、アラスカ湾を回遊し、厳しく過酷な自然を生き抜いて、再びこの母なる川の川に戻ってくる。川辺に立ち、その姿を目の当たりにすると、私たちもまた自ら生命を抱き、生きていることの不思議



鮭の寒風干し(乾鮭)

に新たな感動を覚える。箕輪にある孵化場では、冬の風物詩である鮭の寒風干しが今年も見られる。

乾鮭やひと日しずかに日本海 ―あべ小萩

小春日の海は、青空より深い碧が穏やかに広がる。しかしそれは、一日違えば一変する。怒濤は響み、岩根を打ち続ける。寒い日には波の花が舞う。同じ海の顔でもこんなにも違うものかと、自然に対する畏敬の念をことさらに強める。

ひと雨ごとに秋は深まり、冬に近づき、ひと夜ごとに枯れていく一抹の寂しさを迎える。草木の梢や葉が枯れる「末枯れ」である。昼でも薄暗い「雪催い」の日が多くなり、さらに庄内においては、冬の雷つまり「寒雷」が、どこよりも多く発生する。俳句を始めるまでは、この暗くなり



冬の日本海



ゲンショウコの果柄

ちな季節が苦手であった。しかしこの寂しさを素直に受け入れることが、命あるものたちへの惜別の情であり、慈しみの気持ちを増すのである。ふと足元に、種が飛んだ後のゲンショウコを見つけた。その形が御神輿の屋根にある、めぐりあがった飾りに似ていることから「神輿草」の別名があることに思わず微笑んだ。

虎落笛叫びて海に出で去れり ―山口誓子

灰色の空、晴れ間にのぞく青空に、稲架に干した大根の白や、空を飛び渡る白鳥の白が鮮やかに感じられる。遅く轟く雷や虎落笛で眠れぬ夜でさえも、冬の訪れを感じる。庄内の晩秋、五感を研ぎ澄ませながら歩けば、また新たな気持ちに出会えるかもしれない。

写真・文|| 俵谷敦子「あべ小萩」(月刊俳誌「月の匣」同人)